

しているのだと言外に思いをこめて聞かせ、再会を約束して去る。一方勘平が知らぬ間に父与市兵衛は娘おかるに祇園に奉公させ、その金で再び婿を武士にしようして六月二十九日京の一文屋まで行って、貰った五十両を縞の財布に入れてふところに、夜道をこの街道まで来る。そのころ斧九太夫の子の定九郎が強盗をしていて与市兵衛を殺し、金を奪って去ろうとするところを猪と間違えた勘平の鉄砲に射殺される。勘平は死骸に触れて人と知っておどろくが、懷中に財布があるので天の与えと喜んでそれを持って千崎のあとを追う。

最近は初めの勘平と千崎の出あい「鉄砲渡し」が復活し、常時上演される。この「鉄砲渡し」で勘平が花道へ入ると、舞台が廻り、掛稲と松の木一本の簡素な舞台となる。すぐ花道から与市兵衛が出て来て掛稲の前で独り言を言い、財布を出して押したたくと掛稲から真白の手が出て財布をひったくる。そして与市兵衛を引きずりこみ刀で脇腹を刺した恰好で定九郎が初めて顔を出す。……というのが現行の演出だが、これは原作とは随分違った演出だ。原作では与市兵衛が花道から出ると後から「おおいおおい」と定九郎が出て来て、「道連れになろう。金を貸してくれ。」と掛合い、断られてから殺す。これを今のように省略してしまったのは四代目市川団蔵が定九郎、与市兵衛二役にかわった時からといわれる。(二代目嵐三五郎がのこしたのもう一役勘平に変わるといふのもある)これは珍型であまりやらない。殺し場をていねいに演じる型は大正十三年師走本郷座で二代目左団次が復活したのと、最近の前進座以外例がない。定九郎という役は、本来スターの扮する役ではなかったが、明和の頃初代仲蔵が工夫して今の黒羽二重の紋付という美しい男の役にした。これが仲蔵の出世役となり、それ以来定九郎の扮装が固定してしまった。もつともこの着付は羽二重以外に人によつては黒ちりめんを使うのもあり、帯も萌黄の博多、刀も黒鞘など好みがいろいろある。掛稲から出て与市兵衛を足蹴にし、口に財布をくわえて刀を拭く見得があり、そのあと「ひぐらし」といふ忍び三重で財布の金を数えるしぐさ、足にまつわる蚊を払うしぐさ等役者の見せどころだ。傘を拾って定九郎は下手へ。泥道まで行きかけてあわてて引き返し刀を鞘ごとぬいて掛稲にかくれる。花道から猪が出る。猪は舞台を一巡して上手へ入る。この間に定九郎役者は、掛稲の中で胸に血のりをぬり、財布を前のは別の紐の長いものにとりかえる。その紐を首にかけ、血をかくしながら外へ出る。そして後向きそのままよつとすべる。これは、ぬかるみにすべった心だが、この時の定九郎の形が猪に似せて見せる意味をもつのが口伝で、六代目菊五郎はこの気持をはっきりみせた。この時、花道で鉄砲。定九郎は虚空をつかんで身もだえ、「背ギバ」という技巧を使って倒れる。口から血を吐く。倒れた形は、頭を上手に、左足を曲げて右足の上のせるのが正しい方法だ。勘平が縄をかけるのに好都合だからである。

「二つ玉」の現行の型は、揚幕でドンと一発、花道までかけて出た勘平がもう一発射つことになっている。この「二つ玉」の場は、義太夫の方ではこの場を特に意味する通言になっている。勘平の型は、大体五代目尾上菊五郎が完成した様式美の濃い演出が規範となっている。花道で鉄砲を射つてはずみで体を引き、立ち上つて足を運ぶあたりの演出はすべて五代目型だ。火縄を振って舞台にかかった勘平は下手で火を消す。以後は真の闇。猪と思つてさぐり「こりや人」とおどろく。逃げかけた勘平が財布をとりに戻り、行きかけると紐があるので小刀で切る。ここで定九郎の首が持ち上る珍型もある。以後六段目の帰宅までの勘平は、松坂縞様のお召か、手織紬の着付で手甲、脚絆、肩簍をつける。東京では、菊五郎系の人が菊五郎格子の肩入れを、大阪は緋の肩入れをつける。花道の「飛ぶが如くに」の引っこみは、この段最後の見せ場で技巧を要するところだ。「五段目」を鑑賞する場合、定九郎をスターにした演出は面白いけれども、あくまでも原作にもとめるものであることだけは注意したい。人形と同じように歌舞伎の場合も通し上演の際には、原作に従った方が院本の意義が理解出来ることだけは事実だ。

☆芸談 団蔵型の勘平 八代目市川団蔵

浄るりへ猪撃ち止めしと勘平は」で駆けて出て、花道の七三でつまずき鉄砲の先をつき、裏向きに舞台を見込んできまり、火縄の消えたのち蓑をぬぎ鉄砲をくるみ、山刀で打つ所や縄さばきもきつぱりきまりません。右手に縄を持ち、探り寄つて左手で定九郎の足先を持ち上げ、手触りが違つのでハツとして放すのが木の頭、考えながらまた探り、足に指があるので驚く、そのうちに舞台が回ります。六段目で、「お駕籠でもあるまい」のせりふはなく、夜具縞の筒袖をぬぎ、銘仙縞に肩入れのある着付と着替えます(ここで紋服にならぬのは、相手が町人ゆえでしょう)。財布の件は煙管を使わず、「女房ども茶を一つたも」と言つて、同じ切れの風呂敷を左に持ち、右手は懷から財布の先だけ出して見合わせ、ハツとなり向こうを見て驚く(その内、右手を袖口から出す)、体が乗り出すようになり、

右手がおかるの持つて来た茶碗をのせた盆に当たり、茶をこぼす。後は侍という心で、あまりハラハラしませんが、与一(市)兵衛の死骸が来たときは、思い入れをして裏向きにうつむいてしまいます。浄るりへのういとしや与一兵衛殿」でおかやが上手へ行く所は、邪魔にならぬほどの芝居をしました。浄るりへーかっぱと伏して泣きいたる」でおかやが泣きながら咳き込むので、背をなでながらなだめかけると、おかやに突き放され、後ろへ右手を突くのが、浄るりへ身の誤りに勘平も」です。二人侍が出てから、母に留められ、それを払うはずみに脇が脾腹に当たり、母が倒れるのを見て、床のめりやすに乗ってきまります。自分の着物を見て、見苦しいので押入れの古葛籠から浅黄紋付の着物を出して着替えようとして、鷹の羽の主君の紋を見、(親殺しの罪ある身でこれを着ては済まぬ)という思い入れで紋をいただき、そのままにし、渋の包紙から刀を出してさします(刀の身で髪を写しなどしませぬ)。弥五郎に金を戻されてからは、もう覚悟をきめてじつと堪えているが、郷右衛門に「亡君のご恥辱に心が付かぬか」と言われて言い訳をする気になり、「お下にござつてお聞き下され」のあと、門口をあけてあたりを見回し木戸を閉めて、「弥五郎殿、夜前貴殿にお目にかかり一撃止めたるは」、一人「撃ち止めたるは」、「舅殿」と言いにくそうに後ろを向く。弥五郎が「コリヤ鉄砲」というせりふで腹を突くのです(顔へ血をつけず、鬘もさばきません)。連判をひるげたとき、腰を立ててきまり、もう目がちらちらして見えぬこなし。血判は弥五郎が手を持ち添えてさしたのち、「行年二十九歳、早野勘平、ケ、ケ」と、もう声が出ぬので、郷右衛門が「血判確かに受け取ったぞよ」と言うのが耳に入ったので嬉しそうに笑います。幕切れに郷右衛門が差図をして紋服をはおらせました。この勘平はおもに三代目菊五郎の型で、父としてはなかなか芝居をしました。鬘は逆熊さかくまでなく、茸毛ふきげです。(『七世市川團藏』による)

☆参考 鸚鵡籠中記

元禄十四年三月

○十四日 快晴○子刻前火南に騰る○庚申堂の側の町屋十余軒焼。○御城の方角になき故、予不出。伸満は大方彦兵へ出たり。自今実の火事名古屋の内ならは可出也。

○於江戸喧嘩有。毎年春勅使・院使江戸へ有之。高家衆吉良上野介と、其外大名兩人宛御馳走に懸る事也。今度も上野介と浅野内匠と外に何の某と云者懸る。某は賂を吉良へ遣して、首尾を頼む。内匠にも音信可遣由、家老すゝむといへども、賂を以て諛事なしとて、少も不遣。吉良は欲深き者故、前々皆音信に而頼むに、今度内匠が仕方不快とて、何事に付而も言合せ知らせなく、事々に於て内匠齟齬する事多し。内匠含之。今日於殿中、御老中前に而吉良云様、今度内匠万事不自由ふもとをり不可言、公家衆も不快と被息と云。内匠弥含之座を立。其次の廊下に而、内匠刀を抜て詞を懸て、吉良か烏帽子をかけて頭を切る。吉良駭て急ぎぐりの様成所をくぐるを、後より腰を切といへども、共に薄手に而つゝがなし。猶追かけんとせし処を、御腰物香梶川与三兵衛、後より内匠を組留て働かせず。翌日与三兵衛五百石御加増増五。内匠は則田村石京大天に御預け、其夜切腹被 仰付て云く、勅答未終の間に、殿中に而狼籍の仕方甚不屈と思召と云々。吉良に何の御かまひなく喧嘩の沙汰に不被 仰出間、吉良も疵養生し、前のごとく可相勤と云々。内匠従兄弟戸田采女頭、内匠弟浅野大学、右兩人に内匠召仕等不騒動様に、国元共に可致由被 仰付也。今日 勅答も未終、殊に殿中の喧嘩は是非を不論。先太刀打者非分になる事也。上野介は四千二膏石、従四位下少将也。父は若狭守。内匠は長矩と云。五万石余。居城は播州赤穂。江戸より百五十五里有之。内室は松平紀伊守女。

元禄十六年十二月

○十五日 久右へ行。夕飯給。数右父子・武兵・源右等。

○夜、江戸に而、浅野内匠家来四十七人亡主の怨を報ずると称し、吉良上野介首を取り芝専泉岳寺へ立退。評見塵点録廿五雜言部

○廿日

○内匠家来片岡源五右衛門は、熊井十次郎か子也。仍之遠慮す。中根清太夫も又従兄弟故、是は自分遠慮。